
ワルキューレの憂鬱

柴田めい (aromaman)

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ワルキューレの憂鬱

【Nコード】

N1195Y

【作者名】

柴田めい (aromaman)

【あらすじ】

少し展開変更しまして、ヴァルキリー、人間、魔族の三つ巴の戦い。。。になる予定。北欧神話とは関係ない内容になります。現在連載している歴史物の気分転換で書きますので、更新は不定期になります。

池のほとり

白い小さな鳥が池の傍に寝そべる女の肩に乗り、さえずり始めた。女は少し顔を上げ、けだるそうな視線を投げる。ふっと微笑み、再び柔らかな苔の上に頬を預けた。

「平和だな」

すると近くで腰まである淡い金色の髪を櫛で梳いていた女が、小さなため息をついた。

「そうね。おかげで退屈きわまりない」

池を囲む木々がざわめいて、森の中からもう一人、女が姿を現した。

「戦の種はあちこちに散らばっている。芽が出るのももうすぐだろっ」

寝そべる女の近くに腰を下ろすと、驚いた鳥は飛び去っていく。

「あーあ、逃げちゃった。かわいかったのに」

「ならば打ち落として手元に置くか」

森から現れた女は背から矢と弓を取ると、鳥に向かってつがえた。燃えるような赤い髪が、弦を引く腕の動きに合わせて揺れている。

寝そべっていた女は起き上がると、弓を持つ女の手を掴んで引き寄せた。

「やめて」

「ふん。慈悲のヴァルキリー。戦場で泣いてばかりで、何の役にも立たぬ奴」

「狩りのヴァルキリー。なんでいちいち目につくものを打ち落としたりするの？ 今夜のおかずはもう十分に獲ったじゃないの。これ以上は無益よ」

慈悲のヴァルキリーは明るい栗色の髪についた苔を払いながら、狩のヴァルキリーをにらみつけた。

「よしなさいよ、二人とも。退屈だからって、つまらないことで

言い争わないで」

すると狩りのヴァルキリーは、呆れたような表情を浮かべ、髪を梳き続ける女を眺める。

「誘惑のヴァルキリー。お前はいつも自分の手入ればかりしていて、よく飽きないな」

誘惑のヴァルキリーは傍らに櫛を置き、髪を指で梳いて滑らかさを確かめると、満足げな笑みを浮かべた。

「わたしの美しさが羨ましい？ あなたもそれなりなんだし、狩りばかりしてないで、少しは肌を磨くなり髪を梳くなりしてはいいか？ そうすれば、わたしほどではないにしても、人間の男くらいなら見惚れさせることはできるのではないかしら」

誘惑のヴァルキリーは水面に顔を映し、うっとりを見入る。

「ばかばかしい。わたしほどではないにしても、だってさ」

狩りのヴァルキリーは慈悲のヴァルキリーに向かって、深い緑の瞳をくるりと回して見せた。

口喧嘩は多くても、三人の仲は良かった。

ヴァルキリーは八人で一つのグループを成している。ほかの五人は今、仲間と一緒に暮らす屋敷で惰眠をむさぼっていた。

「それにしても、どうして喧嘩するってときになると、いつも肩書きで呼び始めるの？」

狩のヴァルキリーのしぐさに小さく笑いながら、慈悲のヴァルキリーが尋ねた。

「なんとなく。そっちのほうがこれから喧嘩するって気分になれるじゃないか。お前だって肩書きで返したくせに」

「わたしもやる気まんまんだもの」

慈悲のヴァルキリーは肩をすくめると、「ドリヴルもエイルも馬鹿みたい」と、誘惑のヴァルキリーが水面から顔を上げた。

透き通るほどに淡い水色の瞳で、森の向こうを眺める。

「ねえ。そろそろ戻りましょうよ。日が傾きかけてるし」

「そうだな。行こう」

そういって、狩のヴァルキリー、ドリヴルが手を差し出した。その手を掴み、エイルが立ち上がる。

すると突然手を振り解かれ、池に突き落とされた。

「何すんのよ！」

エイルは手足をばたつかせ、体勢を立て直そうと水しぶきを上げている。

「帰る前に水浴びだ」

そう言っただけのベージユのワンピースを脱いで素っ裸になると、ドリヴルが池に飛び込んだ。

二人が立てる水しぶきが飛んできて、誘惑のヴァルキリーが顔をしかめる。

「もう。衣が濡れちゃったじゃないの」

「スヴァン、お前も来いよ」

岸に戻ろうとするエイルのワンピースの裾を掴みながら、ドリヴルが誘った。

「嫌よ。屋敷で風呂に入ったほうが気持ちいいもの。……先に帰ってるわね」

そういって、スヴァンは二人に背を向けて歩きだす。

「わたしも帰りたい！ もう、離してよ、ドリヴル」

「どうせ濡れちゃったんだし、諦めろよ。もう少し遊んでいこう」

エイルは潜って頭からワンピースを引き抜くと、まだ裾を掴んでいるドリヴルの手から奪い取った。そのまま岸のほうへ放り投げる。

「じゃあ、向こうの岸まで競争しましょう。負けたほうは、今夜マッサージをするっていうのはどう？」

「香油で丹念に？」

「ええ。スヴァンが肌を磨けって言ってたじゃない」

「のった！」

ドリヴルは足で水を蹴り、猛烈な勢いで泳ぎだした。

「まったく……」

エイルは軽く舌打ちをして、ドリヴルの後を追い始めた。

人間の男

泳ぎが得意なエイルは、あっという間にドリヴルを追い越し、向かいの岸に手を付いた。

少し遅れて到着するドリヴルを、余裕の笑顔を浮かべて眺めている。

「じゃあ、今夜はマッサージよろしくね」

「くそ。今度は勝てると思ったのに」

ドリブルはぶつぶつと文句をつぶやきながら岸へ上がると、頭を大きく振って髪の毛を払った。矢筒に自前で取り付けた小物入れからヘアゴムを取り出すと、頭頂部でひとつにまとめる。濡れたままの体にワンピースを羽織り、森の小道へと向かった。

片手をひらひらと振りながら、
「じゃあ、わたしは先に帰るよ。屋敷でオイルを調合して待ってるよ」

と、悔しがっていた割にはあっけらかんとした様子で言う。

「ローズは入れないでね。甘ったるすぎて気分が悪くなるから。」

ローズマリーにして」

「了解」

屋敷に向かう前に、仕留めた動物を取りに行くのだろう。小道の手前で大きな麻袋を拾い上げ、肩にかけてから森へと入っていく。

エイルも岸へ上がったが、自分のワンピースはさぶ濡れで、持ち上げると雫が垂れた。

「もう、こんなじゃ気持ち悪くて着れないじゃない……」

ため息をついて両手で絞ると、大量の水が地面に水溜りを作った。髪も同じように絞ったが、ゴムは持っていないので、そのまま垂らしておく。裸の背に濡れた髪が張り付いて、心地悪いことこの上ない。

季節は初夏で暖かいとはいえ、もうすぐ日が暮れる。一気に気温

は下がるだろう。

(仕方ない……)

唇に指を当て、短く二度、最期に少し長く口笛を吹いた。少し間をおいて、空の向こうから大きな影が現れた。

ひっそりと地面に舞い降りたのは、黄金色の獅子だった。二メートルを越す巨体のわりには、優雅な身のこなしで物音ひとつ立てない。

「久しぶり。ごめん、今日は戦いつて訳じゃないの……」

鬣に顔を寄せて挨拶すると、獅子は喉を鳴らした。

「見ての通り、裸なのよね。少し寒くなってきたし、屋敷まで背に乗って毛に包まれていたい。ほんと、これだけのことで呼び出しちゃって心苦しいんだけど……。いい？」

獅子は了解の印に、鼻をエイルの頬に擦り付けた。

「ありがとう。帰ったら、おいしい肉をあげるわね」

大きな頭を撫でたあと、エイルは伏せの姿勢を取った獅子の背に乗った。

「あ、そのワンピース、啞えといってくれるかな。わたしはしがみつくので精一杯だから」

獅子はワンピースの襟の辺りを啞えると、空へと跳躍した。

追っ手を避けて森へ逃げ込んだ男は、肩に刺さった矢を無理に抜き取った。激しい痛みで気が遠くなっただが、安全を確認するまで気を失うわけにはいかない。気持ちだけでも落ち着かせようと、深呼吸する。

ヴァルキリーの庇護を受けているこの精霊の森には、あいつらは入ってこれない。

だが人間の自分も、ここにいればヴァルキリーの怒りをもってしまっただろう。

それでも魔族の食料にされるよりは、ヴァルキリーに殺されるほ

うがましだと思い、入り込んだのだった。

ヒヒのような姿をした十匹程度の小さな魔物の群れは、男に矢を放ち、追いたてて楽しんでた。しかし彼が森を迂回せずに中へ入っていくのを見ると、悔しそうに甲高い雄たけびを上げた。遊ばずに、さつさと足を狙って捕まえればよかったと思っただろう。あいつらは、人間が苦しむ表情、叫び声が好きで、わざと息の根を止めないままに食べ始める。

樹齢百年は優に超えているだろう大木の根元に腰掛け、疲れ果てた体を休めた。

ずっと走り続けていたせいで、喉が渴いている。早く走るために荷物はほとんど捨ててきた。飲み水の入った筒も、腰のあたりで揺れて邪魔になったので途中で投げ捨ててしまった。今残っているのは、背に巻きつけている矢と弓だけだ。

(これからどうする?)

そう思いながら空を見上げた男の目が、細められた。

獣のようなものが、布を啜えて飛んでいる。

その布が風に吹かれてひるがえったとき、それがワンピースだと気づいた。

(女を食べたのか?)

まるで猫がねずみをいたぶるかのように追い立てられた怒り、同族を殺された怒りが、肩の痛みを忘れさせる。

立ち上がると背から弓と矢を取り、構えると強く引き絞った。狙いを定め、矢を放つ。

矢はゆったりとした弧を描き、獣のわき腹へと吸い込まれていく。その瞬間、甲高い獣の悲鳴が森の木々を揺らした。

獅子の叫びを聞いたエイルは、何かと下を覗き込んだ。

わき腹に矢が刺さっているのを見て(ドリブル?)と仲間を一瞬疑ったが、戦士の生まれ変わりであるこの獅子を狩るはずはないと

すぐに思い直す。

「痛むだろうけど、少し我慢してこの辺を旋回して」と指示を出す
と森を見下ろし、矢を放った者を探し始めた。

すると、もう一度矢が飛んできた。

エイルは腕を伸ばし、再び獅子のわき腹に刺さる前に掴んで止める。

矢を半分に折り、放り投げながら、飛んできたあたりにもう一度
目をこらすと、弓を持って構えている男の姿が見えた。

「あそこだ。降りて」

毛の中に埋めていた体を起こし、狙いにくいようにジグザクに駆け降りていく獅子の鬣をしっかりと掴む。

(なんだ、あれは……)

再び弓に矢をつがえていた男の手が、ゆっくりと下りた。

獅子の背に、女が乗っている。しかもどうやら上半身裸らしい。

(ヴァルキリーか？ まさか、ヴァルキリーが飼っている獣だったのか？
なんで何も着ていないんだ？)

混乱する頭に、さまざまな疑問が浮かぶ。

獅子が近づくとつれ、その巨体に圧倒される。女性の怒りに歪んだ表情も、少しずつはつきりと見えてくる。

エイルは獅子から飛び降りると、わき腹から矢を引き抜いた。

「すぐ治療してあげるから、少し待っていてね」

そう耳元でつぶやくと、獅子は悲しげに鼻を鳴らした。皮膚が厚いので、人間ごときが放った矢は深く刺さっていない。甘えたいだけらしい。

エイルが人間に向かって歩きはじめると、獅子は背後で頭を低く垂らし、攻撃の姿勢を取った。

人間の男2

「ここで何をしている？　ここはヴァルキリーの庇護を受けた森だと知らないのか？」

その声をかけると、目を大きく見開いてこちらを凝視していた男は、慌てて目を伏せた。

「なぜ、矢を放ったんだ？　……目を逸らすな。問いに答えろ」
ヴァルキリーらしい威厳が出るようにと、わざと硬い口調で尋ねる。

「魔族に追い立てられ、やむなくここへ入った。すぐに出ていく」
男は目を伏せたままだ。

「ここが精霊の森と知って入ったのなら、なぜ矢を放った？」

「それは……。すまないが、何か着てくれないか。落ち着いて話
が
できん」

エイルは訝しげな表情を浮かべ、自分の裸体を見下ろした。

「どうして？　女の裸を見るのは初めてなのか？」

「いや、そうではないが……。恥ずかしくないのか？」

エイルは呆れてぐるりと目を回してみせた。

「ただの入れ物だというのに、どうして恥ずかしがる必要がある」

「いや……。人間というのは、そうそう裸体を他人に見せる風習はない。特に女は」

「そうか。あいにくわたしは人間ではないし、今は羽織るものもない。さきほどまで着ていた衣は濡れてしまつて、気持ちが悪いし
な」

攻撃姿勢を崩さない獅子の口には、相変わらずエイルのワンピースが啜えられていた。

エイルは再び厳しい表情を浮かべ、男をにらみつけた。

「どうして矢を放ったのか、その答えを聞いていない」

男は俯いたまま、「獣が人間の女を食べたのだと勘違いした。：

…申し訳ないことをした」と答えた。

「精霊の森には、人間を食らうような獣はいない。それにあいつは獣ではないし、わたしの許可なしでは人間を食らうこともない」
大きな獅子は獣以外の何者にも見えなかったが、エイルの裸体に動揺する男には問うほどの余裕がなかった。相変わらず目を逸らしたまま、謝罪の言葉を口にした。

「そうなのか。ずっと追われていたから、気が動転していたんだ。言われてみればそうだな。心からお詫び申し上げる」

フンと鼻を鳴らす音が聞こえたあと、「謝っても遅い」と言いながらヴァルキリーが近づいてくる気配を感じた。

（もうだめだ。……仕方ない。魔物に生きながら食われるよりは断然ましだ）と歯を食いしばり、目を閉じて刃が首に降りてくるのを待つ。

しかしいつまでたっても刃が風を切る音は聞こえないし、首元に衝撃も感じない。

恐るおそるまぶたを開き、頭を上げると、すぐ目の前に立って興味深げにこちらを覗き込んでいた。

身の丈百八十を優に超える男をそれほど見上げることもなく、少し顎を上げた程度で視線を合わせてくる。

そして小首を傾げ、「怪我をしている」とつぶやいた。

「矢が何箇所か当たったからな」

男がヴァルキリーを実際ににしたのは、この日が初めてだった。

噂では、見た目は美しいが冷酷で、人間のことを魔族と同様の、またはそれ以下の下等動物と考えていると聞いていた。しかしこのヴァルキリーはどことなく穏やかで、瞳も冷たいというより好奇心に輝いているように見えた。先ほどまで纏っていた殺気も消えている。

「傷を癒してやる。それが終わったらすぐここから出ていけ」

「それはありがたい話だが……」

「それを着てはやりにくい。とりあえず、ぜんぶ脱げ」
「は？」

呆けたように口を開いてその場に固まる男を見て、苛立ったエイルは声を荒げた。

「脱がないと傷が見えない。早く脱げ」

「いや、しかし……」

「恥ずかしいのか？ さっきも言っただろう。体など、ただの入れ物にすぎない。多少形が違っていたところで、気にすることはない」

「そつちは気にならかもしれないが……」

躊躇する男の体が、いきなり背後の木に叩きつけられた。

「そもそも、お前は見つかった時点で殺されてもおかしくない立場なんだぞ。それを癒してやると言っているのだから、素直に言うことを聞け。それともこのまま殴り殺されたいのか？ 見ての通り、今は剣を持っていない。苦しみたくないのなら、あいつに食わせるという方法もある。一口でお前の体半分が消えるだろうから」

そう言って、背後で低く唸っている獅子を振り返った。

「……わかった」

鎧は重くて体力を奪う一方だったので、森に入る前、岩陰に隠れたときに脱ぎ捨てていた。今身に着けているのは、木綿の貫頭衣一枚だ。これを頭から引き抜けば、全裸になる。

目の前のヴァルキリーも一糸纏わぬ姿だが、男である自分のほうが羞恥心を覚えていることにも戸惑っていた。

「寒いから、さっさとしてくれないか。もう日が落ちかけている腕に目を落とすと、ヴァルキリーの白くなめらかな肌が泡立っていた。」

「ヴァルキリーも寒さを感じるのか」

「当たり前だろう。もう、そんなことはどうでもいいから、早くしろー」

エイルの右眉が勢い良く上がり、片足を地面に打ちつけながら腕を組むと、むっつりと睨みつけた。

すると男は反射的に衣を脱ぎ捨てた。

「脱いだぞ」

衣で腰のあたりを隠しながら言うと、エイルは「まったく。たった一枚脱ぐのにどれだけ時間をかけているんだか」とブツブツ言いながら近寄った。そして一番深いと思われる肩の傷に目を留める。

「では、ここから始めるぞ」

その後のエイルの行動に男はまた度肝を抜かれ、飛び退ろうとした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1195y/>

ワルキューレの憂鬱

2012年1月6日21時49分発行